

美容実習における学習指導とその効果について

—美容実践教育の高度化を目的として—

富金原 光 秀

Hairdresser Practical Course of Teaching and Its Effect on

— Sophisticated Hairdresser of Highly Education to Purposes —

FUKINBARA Mitsuhide

キーワード：美容実習、美容実践教育、美容カリキュラム

はじめに

ここ数年の間に、美容業や美容師の社会的役割、美容学校に通う学生のスタイル、美容専門学校の細分化された学科の設置など、時代の変化とともに、美容業界を取り巻く状況もますます複雑化、多様化し様々な様相を見せている。そして現場に対応できる美容師を支えていく為の美容学校教育の重要性も増している。つまり学校は、現代社会の中で、美容を職業とする諸課題に対応できる人材を育成すべく、確かな美容の基礎的技術と学力の習得に加え、社会的な要求と連動しながらその要求を具現化できる実践性などの専門性をいっそう磨き、高度化することが必須であると筆者は考えている。

ハーバート・リードは、「美的教育は、教育の基礎たるべし」として、芸術を教育に先立って位置づけするのは、「教育の目的は、必然的に個人の独自性と同時に社会的意義、若しくは相互依存を発達させることにある。」とする教育論を展開し、さらには、「すなわち人間の意識—究極には、個人の人間の知能や判断—の基礎となっている諸種の感覚の教育に外ならない。これ等の諸種の感覚が、外部の世界と調和し、かつ持続的な関係におかれた場合にのみ完成した人格が、築きあげら

れる。』¹⁾と説明している。このリードの人格形成論は、美容師養成教育においても例外ではない。美に関わる業に携わっていく者にとって五感を働かせながら、独自の見解や技術を駆使し、クライアントに対して施術を施したり、また相互の関係性を保ちながら結果としてつくり上げていく造形美や信頼感は実践生活世界をきりひらいていく「生きる力」となりうる。

そこで、筆者は、美容を職業として自立した人格に至る為の必須条件は以下の4つの項目の総合的な習得にあると考える。そもそも美容における技術や技能とは、職業や生活に深く関わる技術や技能の獲得を意味し、その根本には以下の4条件の獲得が必須であると考えている。

- ①美容の基礎的技術（ワインディング・カット・オールウェーブ等基礎的技術）
- ②表現力・創造力
- ③情報収集能力
- ④コミュニケーション能力（自己理解・他者理解）

以上は美容技術において必要不可欠な項目であるといえる。

それらを踏まえて、仕事や生活を主体的に育むための能力の形成を図る為の、実践的な技術・技能を獲得していく過程と方法を探る。この学習の目標設定とそれに基づく成果によって、学生自身が意思決定しながら自立した生活者として創造、発展させていくプロセスを形成できるのではない

かと考える。

①美容の基礎的技術における学習効果

美容業の必須事項の1番目として、美容の基礎的技術が挙げられることは言うまでもない。

美容技術のように、身体にいわば「技」として覚えこませ積み上げていくという知のスタイルは、まさしく「実習」を通した学習からでしか学ぶことのできない制作過程であり、それは不可避的に一定の「時間」を要する。日々の訓練や練習を重ね、そしてつくりあげた作品や課題を検証し、その活動を通して感性を豊かにしていくことの必要性は重要となる。このようないわば、実践的の反復表現教育は、実際的に関わる社会生活に大きく影響すると考えられ、「公」「私」の公共性問題についても間接的に学習していくことを示唆すると考えられる。そこで、美容実習の基本である技術の反復継続過程の意義について、これまでの美容教育者としての経験を踏まえて検証していく。

簡単に技術の習得を諦めたり、終わりにしたりせずに、訓練や練習を重ね、継続して何度となく反復していくと、個人差こそあるが、みるみる技術が向上していく。根拠としては、その過程には、

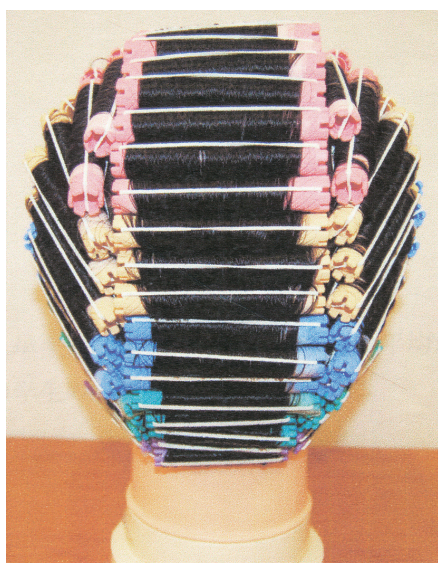
同じことの繰り返しをしているうちに、よりよいアイデアが浮かんできたり、解決の糸口が見えてくることがあり、新たな知見や発見が期待できるからである。その効果としては、

1. 既存の課題やスタイルが、徐々に精緻化していく。
2. 思考の範囲が、点から線へ広がり、発想や着想が生まれる。

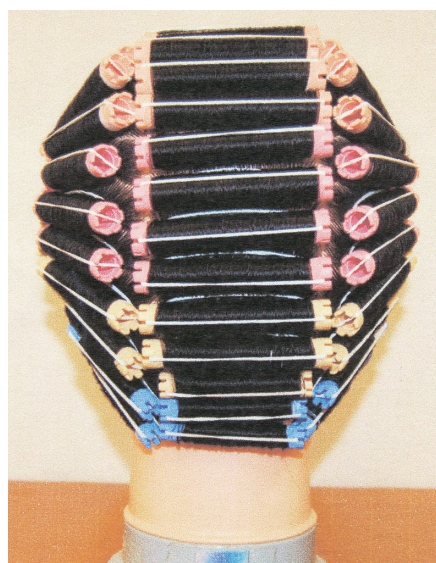
以上の2点が挙げられる。

次の写真は、1, 2年生のワインディング基礎的技術の習得段階を比較してみたものである。各学年とも平均点であった学生の技術を撮影したものである。1年生のスタイルと比べて2年生のスタイルはロッドの配列がより平行であり、左右対称となり、巻き毛の広がりもロッドいっぱいにはほぼ同幅で仕上がっている。2年生は仕上がりの時間もはやく、若干課題の違いはあるが、1年間の練習の差が歴然としている事がわかる。

このことは、美容の基礎的技術の訓練だけでなく、サロンなどの現場においても同様に言えることであり、なにごとにも反復を行っていくうちに上達し、習熟していく。これによって、さまざまな観点に立つことが可能となる。つまり、反復継続は教育する側にもさまざまな気づきを与えてくれ



1年生作品 [旧課題：全頭60分]
(平成22年6月撮影)



2年生作品 [新課題：全頭25分]
(平成22年6月撮影)

る。反復練習や検討をすることによって、物事の観点の選択ないし、分析などの設定がきめ細かくなっていく。そしていろいろな角度から考えていくことができ、知的操作の分化度が進む。第2に、反復練習するうちに当該の問題・課題に関連する知識が自然に想起され、身についていく。古い知識のなかに問題解決につながるものがしばしばある。第3に、反復練習していくうちに、次第に自我関与の程度が強まり、問題解決への執念や創造への意欲が強まってくる効果がある。モチベーションの高い学生が練習熱心であるのはこれらに關係すると考えられる。そもそもワインディング等の課題スタイルの反復（模倣）の過程には、知的機能が存在する。例えば「Aさんにできるのであれば、私にできる。」といったこのような思いの前提として、自己と他者の能力や、素質の類似性あるいは優位性に対する気づきがある。この肯定的な優位性は、モチベーションを生む。このことは広い意味において社会適応化に向けた行動であると考えられる。

②表現力・創造力について

必須事項の2番目として表現力と創造力が挙げられる。これは、訓練や練習による反復継続過程と表裏一体の関係になっている。その理由として、なにがとも反復を行っているうちに、当然のことながら上達していく。これによって、さまざまな観点に立つことが可能となる事はすでに述べた。この過程は、突き詰めれば表現力や創造力の源泉に他ならないのではないかと考えられる。物の見方・考え方を変更することは、それぞれの表現が異なりながら着眼点の変更されていくことを意味する。そして、このことを重視し意識的に変更することの有効性を示唆する。事実同じものでも、違って見えたり、見たりすることは可能である。

そこで錯視の現象を例に挙げて考察していく。

錯視現象

錯視の現象は美容師国家資格において必須科目であり、美容文化論Ⅱの教科書で学習していく。この視覚現象は、美容（ヘア、メイク）をはじめ、ファッションの分野全般における関連項目である。錯視現象はそれに関する知識や経験がなくても、直接感じ取れる表現である。表現から伝わる面白さにより、一層説得力を高める効果をもたらす。その意味において、表現から感じ取られる不思議さや面白さにより、注目性と視覚的興味を喚起する。

図1（ルビンの盃）を例に考察すると、白の盃に黒の背景がある。一転して見方を変えれば二人の黒い横顔が相対しており、背景が白と変わる。このような反転図形は我々の視覚認識の特徴を明らかにしており、一方の見方をとればもう一方の反転図形の認識ができないことが確認できる。もう一方の図（カニッツアの主観的輪郭）は物理的に存在しないはずの三角形の輪郭が確認できる。このように錯視とは、それぞれ認識の仕方が異なっているとわかっているにもかかわらず、なおそのように間違っただけ知覚する現象に特徴がある。すなわち、目を通して外界の事物とその変化を感知する過程で形や大きさ、明暗、色、運動などが見方によって異なって見える現象である。一般的には大きく分けて物理的な錯視の現象と、心理・生理的な錯視の現象に分けられる。物理的錯視の現象は、比較的単純な物理的要因による変化や歪曲である。

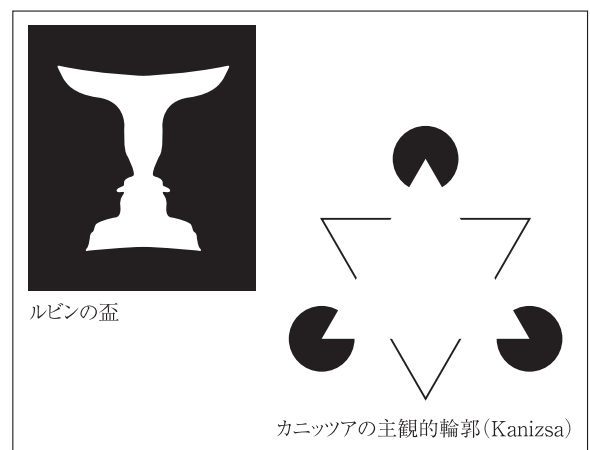


図1

光の屈折によって水の中の棒が折れたように見える現象やプリズム、レンズ鏡、蜃気楼による現象がそれにあたる。一方心理・生理的な錯視の現象とは、感覚器官によって生じる過程の結果として残像、対比現象、幾何学的な錯視の現象などがあり、このことは筆者の論文「補色を基盤とした新たな色彩体系にむけて」²⁾においてくわしく述べていく。また視覚だけでなく、他の感覚を通すこともある。錯視は物理的に存在するものではないので、その原因を明確に究明することは困難である。特に20世紀にはいつてからは、急激に発達した科学と技術により、多くの新たな錯視表現様式が生み出され、強力な視覚的手段の一つとしてさまざまな場所や分野において、数多く利用されている。その錯視の手段は特にファッションやデザイン、現代芸術作品等において、多く強調されている。以上のように、物事の視点や捉え方の変更は、実質的に表現力や創造力に関わってくる。

それは、対人関係においても同様であり、見る側の態度が変われば、同じ人物が違って見える。例えば自己の立場と他者の立場を置き換えて考えてみるなどがそれである。そして、やがては、相手の態度・行動も実際に変化してくる。教師が態度やアプローチを変えることによって学生の側に徐々に変化が見られ、学生の問題行動や性格の改善も期待することができる。実際の具体的な例として、カウンセリングでの共感的理解が有効である。カウンセリングは、美容職業上にも必須の事項であり、顧客の抱えている問題点や悩みの特徴、年齢、性格などに応じて技術的な手法や接客態度、心理的な働きかけなどさまざまに組み合わせて、変更させ、効果をあげる上で大切である。これらの物の見方や考え方を変更していく意義は、実生活における創意工夫でもあり、表現の多様性の確立や、創造的態度の表れに他ならない。

よりよい適応状態を求めて、ものの見方・考え方の変更をしていく。そしてここには相互関係の循環構造が影響している。人の話を聞いて、その指示通りに行動に移し変えるなどがその例である。このような自然や物質の変化、体や心の変化

は、生育上のプロセスではないだろうか。その他、質を変更することにより量を変更したり、量を変えることにより、質を変えるとといったことで、よりよい作品ができたり、新しいものができる。例えば、ヘアスタイルやメイク、装飾（デコレーション）をトータルとしてスタイリングしていく際にバランス上、つけ加え過ぎた箇所にはなるべく余計なものを省いて差し引いていく作用を施したり、また逆に不足している部分には、つけ加えたりといった場合などが、その例である。ワインディング等、美容の基礎的技術の際においても同様で、反復練習をする際、技術において時間的なタイムアップを計りながら、課題スタイルのクオリティをバランスよく身につけていくことが問われる。そもそも物事の構造は、構成要素の空間的あるいは時間的配置や変換に他ならない。技術の組み立てに関しても、試行錯誤を重ねて、結果的に手際が良いか悪いかで、大きな違いがでてくる。このように美容技術のさまざまな形など多数の動作からなるものやヘアメイクと服装・装飾・インテリアなどの併用行為等、物事の状態とは、同時併用の状況に他ならない。何をどのように付け加え、取り除くかによって、物事の改善・改良や動作・作品などの成否が決まる。カラーリングはヘアやメイクをする上で重要な要素となるが、色彩学上の混色のように、加法・減法を用い、ヘアにメイク、カラーリング、そこにアクセサリなどを付ける時など、いずれも基本構造ないし基になるものの状態を損なうことなく、よりよいもの・状態にしていこうとするものである。よりよいものを付け加える作業や、逆に減法により、無駄なものを省いたり、短縮したりする行為は、よりよい状態を検討するのに必須の思考である。もっとも一步間違えれば、せっかくの作品が駄目になってしまうので、足しすぎず、不足しすぎず、程よい加減のバランスが肝心であることは言うまでもない。

図2はサロンにおけるカウンセリングを構造的に表したものである。専門的なカウンセリングを出発点として顧客の悩みや問題点を把握し、表

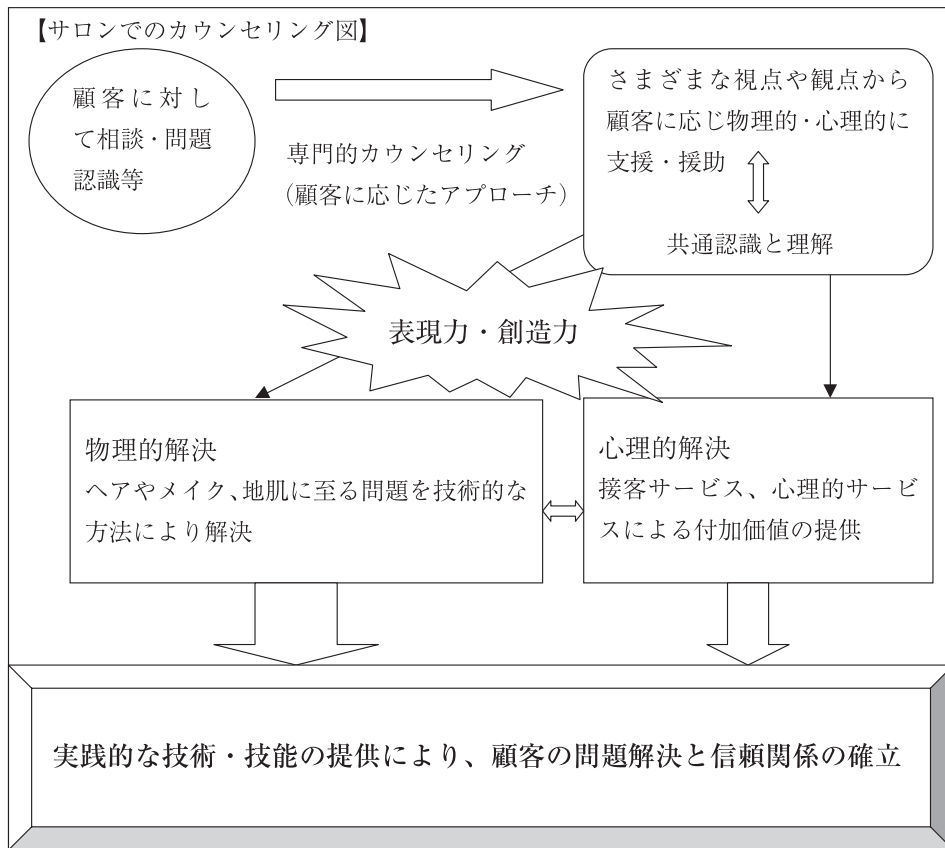


図2

現力・創造力を最大限活用することによってお互いの関係性に質的な向上をもたらし、結果として顧客の問題解決と信頼関係を構築していく。

③情報収集能力

3番目の必須事項として情報収集能力を挙げる。情報収集力といえば広義にとれるが、ここでは授業の中での例を挙げて考察していく。一般に私たちが、知覚する対象は好き嫌いなど個人によって取捨選択された特定の情報であるといえる。ヘアメイクコンテストやヘアショーなどの観戦・鑑賞等において自分が美しいと感じるものが、他人には理解のできないことと感ずることがあるのもその理由からであろう。鑑賞する側はそれぞれに同じ美的作品から異なった感想や印象をもつ。このとき、私たちは同じものを見ていながら、違うものを見たりしている。ここに、互いのフラストレーションを生じることがある。

作品は、情報をリソースしていく鑑賞者側の期待との間に生まれる一種のフラストレーション、視覚的不協和を利用し、人々に良くも悪くも影響を与えている。美に関わる職業につく者は、その不協和に悩まされながら、作品そのものの良さがいったいどこにあるか、深く掘り下げて考える必要がある。私たちは自らの作品に対する意識へと目をむけ、思い込みや常識、さまざまなスキーマに対して疑問をもち始める。この疑問は、やがて作品による不協和を受け入れながら、自分の感覚を修正するという方法によって解消されていく。つまり、美しいと感じさせる作品は不協和によって鑑賞者のスキーマや感覚を変容させ、作品の意味や効果を鑑賞者に考えさせることで、より深い理解へと至らせる。このメカニズムが美容業における情報収集能力の機能と考えることができる。そして、情報を絶えず収集する訓練を重ねて経験や体験を身体に蓄積させることができるのである。作品などの情報の受け取り方は鑑賞者によって

それぞれ決定されるべきものであり、その受け取り方によって作品の質が保障される。この視覚的不協和とは、作品の質を答えとした鑑賞者に対する〈問いかけ〉であるとする事ができる。この〈問い〉が機能する為には、鑑賞者の側に美しいと感じる作品を理解しようという主体的な姿勢が必要となる。鑑賞者にとって情報収集していくことは、作品が不協和を与え、結果的に感覚を変化させるものであり、作品にとっては鑑賞者が作品の質を決定し、完成させる行為といえるのではなからうか。つまり鑑賞者と作品との間で行われる鑑賞という関係行為は、視覚的・聴覚的に情報を得ることで相互に関わり合い、変化を与え合うコミュニケーションのひとつである。このように情報収集とコミュニケーション能力は、一体をなす項目であることがわかる。美的作品を鑑賞し、鑑賞者の感覚が変化したとき、鑑賞者はそれまでみていた周りの物や風景が違って見えると期待できる。鑑賞者によって、作品の不協和が主体的な姿勢で解消されるのだ。鑑賞者の精神的、感覚的な変容と、深い理解こそが美容教育の求めるべきものであり、絶えず情報収集し自らの内部に吸収していくことが重要であるのは、それによって結果として美的価値をさらに深めた人格が確立できていくからである。

また今日では、3Dをはじめとして、映像表現技術が進化し、ウェブなどの登場により個人が情報を発信—受信する手段も飛躍的に進化した。こ

れらの状況を受けて、新しいメディアを用いた授業を行っていくことが今後において必然的な課題となる。

④コミュニケーション能力（自己理解・他者理解）

これまでの整理をすると、技術の習得と表現力・創造力は一体をなし、つまりは、1. 技術の習得は反復継続の訓練を経て感性を豊かにしていく活動であり、2. 美しいものを想像し、それを表現する態度と技能を養うことは〈創る・表現〉であり、3. 情報により美しいものを感じ取る眼を養うことは、美の創造を創り上げる心を育てることである。そして4番目として美しいものを媒介としたコミュニケーション能力を培うことである。〈みせる・共有する〉

これらは、A「自己内」→B「自己の内から外へ」→C「他者（社会）とともに」と、自己認識に留まらず、他者認識を内包する事柄である。そして、表現力・創造力・情報収集力を備えることによってコミュニケーション能力はその力を発揮すると考えられる。

筆者は授業の中で学生個人の好きな作品や趣味などを取り上げたプレゼンテーション発表会を行っている。ひとつの作品を話し合う事で、互いの感じ方、見方の違いに気づきをあたえていく仕組みになっている。

図3はプレゼンテーションの学習内容を図に表

【プレゼンテーション学習の構造】

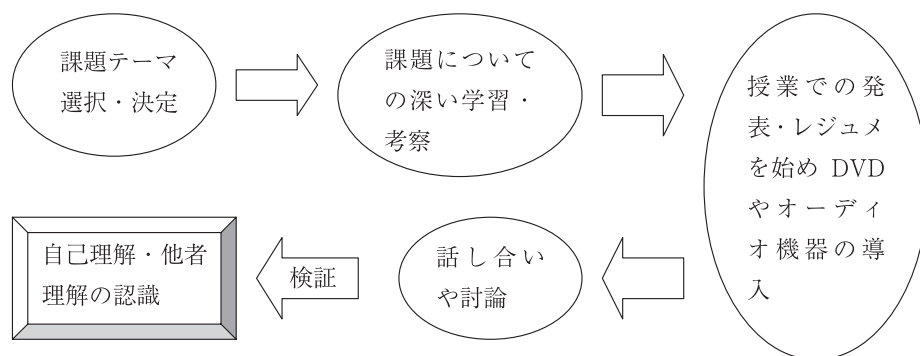


図3

したものである。まず学生は、自己理解や自己分析に重要な作業である課題テーマを選択・決定する。そのテーマの深い考察によって自己認識を含め他者認識を内包していく。そして話し合いや対話を通じて他者理解を確立していく構造となっている。たとえば、美容コンテストやファッションショーを通して、作品の中から自分の好きな作品の理由づけをすることで自己理解が深められ、また他者の好きな作品を認めるといった点で他者理解が深められることがある。具体的には、「作品の色彩など具体的に推測し、想像し作品について紹介していく」というプレゼンテーション能力を活性化させるために色彩要素に注目させる手立てをとる。結果として自己肯定、また他者理解までができたかどうかを検証していくことができ、コミュニケーションとして自己表出することに目をむけすぎず、言語化できない感性も同時に考察できる訓練となる。プレゼンテーションは、カウンセリングの際にも有効性を発揮する。

以下は接客業に必要なコミュニケーション活動を図式化したものである。カウンセリングなどする際に、語り手と聴き手の間では、まず語り手から、経験→イメージ（表現力・創造）→言語→伝達、聴き手は、言語→イメージ（表現力・創造力）→経験という形で伝えあうため、できるだけイメージ（表現力・創造力）を意識することにより、相互の経験の理解が可能となりコミュニケーションが成立していく。

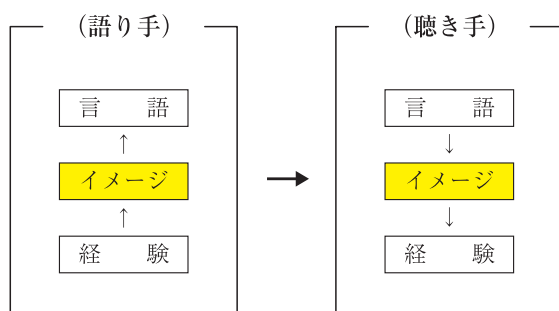


図 4

おわりに

デューイの教育論に、「仕事」つまり実践的「プロジェクト」とよばれる構成活動を設定することによって学生が、「相互作用の原理」と、「連続（反復）の原理」を一体的にしていくことを目的とした研究がある。それによると、体験と経験を通して学生が「意思」を獲得していくとされる。デューイにおいては、対象と自分自身をしっかりと理解し、それが結果的に他者の理解へとつながり、同意のもとで実行すべき「行為」をしていく能力が獲得されると考え、その獲得を目指して、経験に基づく教育を行っている。社会で生きる能力の獲得には、体験を通じた「意思」の重視が必要であるといった論である。美容業は本質的に技術職であり、その根源には経験の蓄積がある。美容教育においても例外でなく経験の獲得により、その教育手法を見出して伝達・伝授していく。これまでの美容業の必須項目として取り上げてきた①美容の基礎的技術（ワインディング・カット・オールウェーブ等基礎的技術）、②表現力・創造力、③情報収集能力、④コミュニケーション能力（自己理解・他者理解）、以上の4つの項目は、相互関係の循環構造となっていることを今回の考察により明らかにすることができた。今後はこれらを踏まえ、具体的に美容教育のさらなる高度化に向けたカリキュラムの作成に着手していきたい。

註

- 1) ハーバート・リード『芸術による教育』（植村鷹千代訳）、美術出版社、1943、p.7
- 2) 富金原光秀『補色を基盤とした新たな色彩体系に向けて』小池学園研究紀要（発表予定）

参考文献

- 1) ジョン・デューイ『経験と教育』（市村尚久訳）、講談社学術文庫、1938

- 2) ジョン・デューイ『民主主義と教育』〈上〉
〈下〉（松野安男訳）、岩波文庫、1916
- 3) 佐藤学編『表現者として育つ』東京大学出版会、1995
- 4) 北山修編『共視論』講談社、2005
- 5) 佐々木健一『美学辞典』東京大学出版会、1995

（東萌ビューティーカレッジ専任教員 富金原光秀）